



編集月旦 2013年5月号

★アベノミクス金融緩和策がさまざまな格差を産んでいることはたしかです。企業ではトヨタとパナソニックに際立ってみえています。世代・個人でみると、年金暮らしのお年寄りに恩恵はないようです。それどころか、自分たちが苦勞してこしらえたみんな等しく豊かになる社会が、足元から崩れていくのを感じています。そのうえ病に冒されていたら生きる気力すら失うでしょう。

☆鳩山総理は施政方針演説で「ひとり暮らしのお年寄りが誰にもみとられずに死を迎える」いたましい事例をとりあげていましたが、安倍総理も麻生副総理もひとことも触れていません。億兆円のお金で人を動かす政治家に、高齢者の実人生など視野にないでしょう。

★大正人（88歳＝米寿以上）のみなさんに申し訳なく思います。戦中は捨て置かれ、戦後（昭和20年＝20歳～34歳）は苦難を負わされ、いままた晩年に敬意どころか黙止されて生きる……。これで「高齢社会」のモデルをつくるなどといわないでほしいものです。先に夫を失ってひとり暮らしの病の床で、幼い日に母さんが歌ってくれたやさしい童謡を口ずさんで耐えている女性高齢者の方もいることでしょう。

☆再録しましたが、「大正生れ」の歌「♪大正生れの俺達は・・・」からは苦勞しつづけた男たちのぼやきが聞こえてきます。ほっと一息ついた1975～80年ころ、50～60歳代になったわが身を省みて歌った歌には、「昭和生まれ」の子どもたちの行く末を思うとまだ休んじゃいられないと、お互いを鼓舞してくれていたのです。

★大正生まれの方々をサミットとする「日本高齢社会」は平和の証です。それをしっかりとつくるのが、平和を守り国を守る姿です。隣国から歴史を学んで反省するよう求められたり、頼りにしているアメリカから言語道断として見放される発言をする政治リーダーは、みずから国際的孤立を深めています。アメリカ・ロシア・中国という三つの大国には含まれた「小日本」。どうして平和を守り、国際的に認められる国として立っていけるのか。将来構想を立て、それに向かってすすむ「国民総和」の平和主義が求められています。国防軍によらずに強い平和主義の国防意識をもつ国民の存在。「憲法」をめぐる議論は、高齢者が現役世代に原体験を伝えて「憲法」護持の潮流を大きくする機会とすべきでしょう。

★地域を活性化することは国防意識と平和主義を強くします。石橋湛山の「小日本主義」や大河内正敏の「農村工業」や田中角栄の「列島改造」をまつまでもなく、競って地域活性化に努めること。世代間討論では、「戦争の悲惨」とともに1980年ころの「九割中流（大同）社会」の良さを語ることも必要でしょう。若者・中年者のもつ「成長力」と高齢者のもつ「成熟力」「継承力」によって新たに形成される地域社会なら国際的にだれが異論をとるのでしょうか。かくして国民活力による「経済全体のパイ」が見えてきます。

★さらに高齢者がみずから打って出ようというのが、「高齢社会イベント月間」です。高連協の総会で岡本憲之氏から提案されたもので、9月15日の「老人の日」、第3月曜日の「敬老の日」、10月1日の「国際高齢者の日」などをふくむ秋のひと月に、各団体の行事を集めて「日本高齢社会」にむかう国民運動を展開しようというものです。

☆「ナノコーポ」（小規模高齢起業）が水玉模様のように各地にひろがっています。高齢社の上田研二さんは伝道師のようにその「ノウハウ」を伝えて多忙なようです。

★一人ひとりが長寿であること、長寿になることを喜べる「日本長寿社会（超高齢社会）」の達成とアジアに住むみんなが力を合わせてつくる「アジアの共生（豊かさの共有）」は、ふたつながら平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の課題です。（編集人・堀 亜起良 堀内正範 記）

